

A man wearing a green jumpsuit, an orange cap, and glasses is crouching next to a horse in a stable. He is looking towards the camera. The horse's head is visible on the left side of the frame. The background shows the interior of a stable with wooden walls and a window.

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.125

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。



PROFILE

尾形 元希さん (21)

Genki Ogata

千厩町小梨

2003年千厩町生まれ。高校を卒業後、就農し、家業の酪農に携わる。飼養頭数70頭、草地35㍍。両親、兄、祖母と5人暮らし。

笑顔が広がる酪農経営を

千厩町小梨 尾形 元希さん

幼い頃から牛がいる生活

田園地帯を見下ろす丘の上の牛舎で、一頭一頭の体調を確認しながら搾乳をする尾形元希さん。父の誠さん、兄の幸希さんと協力しながら手際よく作業を進めていく。

酪農を営む家に生まれた元希さん。学校から帰ってくると、牛舎の近くの遊び場に直行し、家族が牛の世話をする姿を見ながら育った。農業を目指したきっかけは中学生の時、誠さんに「酪農の仕事を経験してみるか」と誘われたこと。やってみると酪農という仕事が「自分に合っている」と感じ、高校卒業後に迷わず就農。酪農の道を突き進むと決め、家業に加わった。最初は、牛に蹴られたりするのではないかと恐る恐る行っていた作業も、就農して4年目の今では楽しく行っている。

循環型農業を实践

元希さんの家族が経営するイタバシファームは、牧草を全て自家生産し、地域の水田で取れるわらを利用するなど循環型農業を实践している。配合飼料を減らす工夫をしながら、自給飼料を与える取り組みにも力を入れる。

毎日の餌やりや搾乳などの管理は、家族で協力して行う。乳量や餌を食べる量、便の観察などを通して、牛の体調に変化がないか皆で気を配りながら作業を行っている。また、牛が暑さを感じてないか、牛に冷たい風が当たっていないかなど、飼育環境にも気を配る。「酪農は誰にでもできる仕事ではない」と元希さん。大型トラクターを操縦して牧草やわらをロールにする作業や、搾乳の仕事は特別感があり、やりがいを感じている。

酪農を続けていきたい

飼料や生産資材の高騰で酪農家の減少が続いているが、「ずっと酪農をしていきたい」と笑顔で話す元希さん。いずれは牛舎を新しくして、牛が快適に過ごせる環境を作りたいと考えている。

酪農家は、牛乳を生産するのが仕事。搾乳量が増えれば経営が安定する。一頭から搾乳できる量、一日に搾乳できる量を増やしていきたいと考えている。飼料にデントコーンを与えることなども視野に入れ、自給飼料の生産量とのバランスを取りながら、頭数増を計画したいと将来を見据える。「地域全体で協力して酪農を盛り上げていきたい」。農業の明るい未来に思いをはせ、父の助言と兄の背中を追いかけるながら、元希さんは今日も笑顔で汗を流す。